

四月二十六日（水）

すっかり夜も深まった時間帯に、水尾東公園のベンチで身体をほぐすことになるとは思いも寄らなかった。もうそろそろ半月になりそうな夜空を見上げながら、「乳酸よ、出ていけ」と強く念じながら、念入りにストレッチする。

「ごめん、遅くなっちゃった」

彩夏が、裏手の水尾図書館の方からではなく、表通りの方から、ファミリーマートの袋を提げてやってきた。

「フレスコ、九時までのね。そっちのファミマまで行ってたら、遅くなりました」

私はお尻を浮かせて、彼女の座るスペースを確保する。彼女はビニール袋から「ファミマ限定」と書かれた五〇〇㉔缶を取り出して、私に差し出した。彼女も自分の分を手にとって、ベンチの腰を下ろすや否や早速開ける。吹き出しかけた泡を口から迎えに行つて、乾杯もなしにいきなり始めてしまった。

私も置いて行かれないように、缶を開ける。向こうが落ち着くまで一応待つて、遅まきながら「乾杯」と缶を軽くぶつけた。グツと喉に流し込むと、だんだん夜も暑くなってきた時期に嬉しい冷たさが、程よい刺激や苦味とともに駆け抜けていく。

「ルミとここで缶ビールを傾げるなんて、夢にも思わなかったな」

「アラサーにもなって、花見でもないのに月を見ながら外飲みなんて、私も想像してなかったな」

「アラサーって」と彩夏は笑った。彼女が隣にいなかった学生の頃は似たようなところでよくやったけど、最近はこういうの、やってなかった。

ぼーっと目の前を眺めていると、案外、交通量はそれなりにある。その割に、背後に広がる団地、住宅街は恐ろしくらしいの静けさが広がっている。私の家も、彩夏の実家も、この静けさの中に含まれている。

「ゴールデンウィークは、なっちゃんどどつか行くの？」

さつきまで背中に感じていた重み、温もりを思い出しながら、彩夏に訊いた。

彼女は「なくんにも決めてない」と言った。

「仕事もいつぱいもらっちゃったし、まだまだ勉強しなきゃいけないこともあるし」

仕事も勉強も依頼したのは、私だったわけ。在宅でも稼げる時に稼いでもらおうと、比較的簡単な仕事をお願いしたつもりだったけど、彼女の「頑張ります」の熱量に甘えて、やりすぎちゃったかもしれない。

配慮が足りずに申し訳ないなど、後頭部を搔いていると、彩夏は「でもね」と明るい声で言った。

「お母さんと一緒に、沢山お出かけするんだって。森田さんのところとも、遊ばせてもらう約束しちゃった」

「へえー。それは、凄いね」

そういえば、芽衣さんのところの亜衣ちゃん、同い年ぐらいだったわけ。彩夏ママもまだまだ若いし、孫とのお出かけを口実に、色んなところへ繰り出しそうだけだ。

「お仕事紹介してくれて、本当にありがとう」

彩夏は勢いよく、深々と頭を下げた。

「気持ちはよく分かったから、もう頭上げて。お願い」

彼女の体を揺すって元に戻るように促すものの、彩夏は彩夏で身体をガチッと固めて、頭を下げたまま戻る気配はない。私が揺さぶりを強めると、彩夏の手中にあつた缶から、ビールが飛び出した。勢いよく彩夏の顔に直撃し、彼女の顔面がビシヤビシヤになる。

彩夏はやつと顔を上げ、無表情で私の方を見る。無言のプレッシャーに、「ごめんなさい」と小さく謝ると、彼女はプツと吹き出して笑った。満面の笑みを浮かべる彼女に、私はタオルハンカチを差し出した。

初出 令和三年五月八日 小説家になろうにて公開